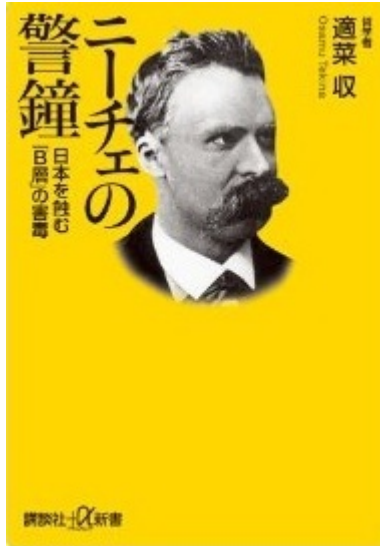


ニーチェの警鐘 日本を蝕む「B層」の害毒



タイトル	ニーチェの警鐘 日本を蝕む「B層」の害毒
著者	適菜 収(てきな おさむ)
出版社	講談社+α新書
発売日	2012年4月20日
ページ数	p182

今の世の中はおかしいと思いませんか？で本書は始まります。

民主主義をはじめとする近代的諸価値を盲信する B 層は、改革という言葉が大好きです。本書によると、B 層とは、

- ・ マスコミ報道に流されやすい比較的 IQ の低い人たちで、
- ・ 小泉郵政改革に熱狂し、
- ・ 民主党のマニフェスト詐欺にコロリと騙され、
- ・ テレビによく登場する流行のラーメン屋に行列をつくるような人たち

を指すそうです。

その B 層や B 層政治家、さらには B 層知識人によって伝統的な価値や教養がぶち壊され、日本社会は狂気に飲み込まれており、その異常ぶり、破滅ぶりを、本書はニーチェの言葉を借りながら糾弾します。

本書でニーチェに叱られる B 層政治家は、小沢一郎、野田佳彦、菅直人、枝野幸男、東国原英夫、橋本徹たちです。ここに鳩山由紀夫については触れていませんが、知性も教養も微塵も感じさせてくれない人なので「論評するに値しない」と判断したのでしょうか。

いずれにしても、彼らは

- ・ 豪腕だったり、
- ・ キレやすかったり、
- ・ 嘘つきだったり、
- ・ しょっちゅう失言したり、

- ・ 支離滅裂だったり

しますが、いずれも「民主的」であり、だからこそ「独裁的」になるわけです。行きつく先は、ナチスの二の舞というわけです。と書くと、飛躍しすぎてよく判らないという人もいますが、本書を読み進めるうちに次第に判ってきます。

彼ら B 層政治家を駆逐するにはどうすれば良いのでしょうか。民主主義が悪質かつ危険な政治システムであることを自覚しつつ、民主主義を行うしかないのでしょうか。

ニーチェは「権力への意志」の中で、「民主政治は、偉大な人間たちや精鋭の社会によせる不信仰を代表する」と言っています。

著者は、私達日本人にもいつか反省する時代がやってくるのでしょうか。という言葉で本書を閉じています。

本書の内容を、ざっと纏めてしまえば以上の通りですが、最近ネットや雑誌で B 層という言葉をよく目にしますが、一体 B 層とはどんな概念なのでしょうか。

B 層というのは、2005 年に小泉内閣が郵政民営化の宣伝企画の立案の際に「スリード」という広告代理店に依頼して定義した概念です。

「スリード」は国民を4つの層に分類します。

- A 層 …… 政策(小泉政権の場合は、郵政民営化)に肯定的で IQ が高い層
(大資本・学者・ジャーナリスト・都市部ホワイトカラーなど)
- B 層 …… 政策のことは良く判らないが、提唱者のキャラクターやパフォーマンスを支持する IQ が低い層
(主婦や老人・低学歴の若者など)
- C 層 …… 政策に否定的な IQ が高い層
- D 層 …… 政策により被害を被っている IQ が低い層

これからも判るように、選挙に最も利用しやすい層は、

- ・ 普段あまり深くものを考える習慣がなく、
- ・ 政策に肯定的で、
- ・ しかも「人数が多い」人達です。

すなわち、小泉内閣がこの「スリード」の分析を十二分に活用したであろうことは刺客などを送り込んで手を尽くしたことからもすぐ判ります。

民主主義、平等主義といった近代的諸価値の徹底を目指す勢力を「左翼」(A 層) といいます。B 層とは、「少し頭の弱い」左翼といえるでしょう。

さて、「B 層政治家が日本を滅ぼす」に登場する数ある人物の中で、B 層を狙っている橋本徹大阪市長（以下彼）に着目してみましょう。

彼は、労組と対決姿勢を示したり、保守層向けのリップサービスを怠らないので勘違いされていますが、根っこは古いタイプの左翼です。京大の中野剛志氏が、彼は「保守じゃないよ。目を覚ませ」と言ったら、彼はブチ切れたそうです。

なぜ保守でないかという、例えば、「文楽」について彼は「文楽は守るが、文楽協会は天下り団体だから守らない」と言っています。文楽は他の都市や外人観光客に誇れる貴重な伝統芸能ですから、今現在、儲かっているのなら、文楽を守るべくいかに儲かる体質にするかを長期的に考えていこうとするのが保守だからです。氏には保守の要件である連続性に欠けるところがあります。

短期的であっても、文楽の歴史が途絶えれば、立て直しに何倍もの費用が掛かります。いきなり削減して文楽が大阪からなくなれば、もともと観光資源の少ない大阪にとっては大きなダメージになります。

彼の手法は、弁護士の示談交渉と同じに見えます。ハッタリのように大きく吹っかけておいて相手を揺さぶり、落としどころを探していくという手法です。これは見る者をハラハラさせてB層を面白がらせるドラマになるからです。

また彼は、思いつきで喋って、途中で消えてしまう話が多いので要注意です。

でも、保守の原理って何でしょう。

まず、保守は自由主義を前提としていますが、その自由も無制限に権利追求を認めるルールのない自由ではなく、ルールの下での自由です。

歴史や伝統を重んじ、急進的な国家改造を警戒すると共に、中庸を重視してポピュリズムを嫌悪します。

また、机上の空論よりも常識や慣行を重んじ、長年の経験に裏打ちされた大人の知恵を持っており、奇抜な流行には走らず、未熟な若者の軽率を戒め、多数派の横暴には断固として立ちはだかる。こういうのを、保守と言うのではないのでしょうか。

彼は、ポピュリズム政治家の典型ですが、ポピュリズムというのは「自分は民意だ」という姿勢で、本来は多様なはずの民意を十把一絡げにして、対立する相手を黙らせる政治的手法です。

彼は、「お国への奉仕は権力欲のため」と放言し、「嘘つきは政治家の始まり」という。残念なことに、彼の下には構造改革に飽き足りない元官僚たちが群がり、大阪をおもちゃに改革ごっこに興じています。

彼は、関電大飯原発の再起動に対して断固阻止の立場を取りました。大阪の大企業は非常用発電機を常備していますが、中小企業はそんなものを持っていま

せんから彼らからの突き上げがありました。

また大飯原発が動かないなら関西はブラックアウト（全面停電）を起こすがそれでも良いのかと迫られ、徐々に電力不足が本当であるということが判って鉾を納めましたが、それでも諦めきれず「夏場限定で容認」と言っています。

安全でないと思っているわけですから、ブラックアウト回避に必要な 25%の節電を大阪府民に要求すべきなのです。夏場限定などというのは消費者のエゴで、原発立地自治体からすれば、「バカにするな」という声も出ようというものです。

最近は「民意、民意」のセミの大合唱のようですが、

- ・ 教育に民意を反映させる、
 - ・ 市職員は民意に従って働いてもらう、
 - ・ 僕が直接選挙で選ばれているので最後は僕が民意だ
- などと、二言目には民意を持ち出して反対意見を退けています。

古代ギリシャから現在まで連綿と続く人類の知の歴史、また、まともな哲学者、思想家、政治学者たちが明らかにしてきたことは、民意を唱える政治家を除去しない限り、文明社会は崩壊するという事実です。

民意で政策が決まるなら、議会など必要ありません。直接投票で物事が決まるなら、知性は必要ありません。

移ろいやすい民意を政治に直接反映させれば、国家は即時崩壊するに決まっています。民主主義の本質は反知性主義にあるからです。

彼は、B層の感情を動かす手法をよく知っており、その言葉遣いには、

- ・ 「バカ新潮」、
- ・ 「バカ文春」、
- ・ 「オナニー新聞」、
- ・ 「クソ教育委員会」、
- ・ 「経済界なんてクソの役にも立たない」

など、その言動は幼児レベルで、大人になってもそのままのまです。このような幼児レベルの物言いには、知性の欠片（かけら）も感じられません。

- ・ 「水道民営化」、
- ・ 「カジノ誘致」、
- ・ 「普天間基地の県外移転」、
- ・ 「資産課税」、
- ・ 「小中学生の留年」、
- ・ 「市職員に対する強制アンケート」、

などは、B層を大衆運動に巻き込むための餌なのです。

抵抗勢力を仕立てあげ、対決姿勢を示すことでB層を煽る手法は、かつての

小泉前首相のワンフレーズ・ポリティックスや広告会社による世論操作と同じです。こうした運動はブレーキがききませんから、破局まで進む心配がありません。

橋下現象を生み出したのは、もとはと言えば小泉政治です。あの選挙では自民党が支持されたのではなく、小泉氏のパフォーマンスが支持されたのです。氏の作り出した衆愚政治は、次の選挙で民主党政権を生み出し、次には、維新の会を表舞台に押し出そうとしています。

橋下市長は保守ではないと分っても、彼に擦り寄る保守政治家がいるのも不思議です。

さて、本書で取り上げているニーチェの言葉には、短い章句に大きな体験と思索が込められています。私も書評を書くために、本棚から「ツアラトウストラはかく語りき」(以下、ツアラトウストラ:ただし西尾幹二氏の「ニーチェとの対話」)を取り出して拾い読みをしています。再度、感銘を受けています。

私にはニーチェの全体像をつかみきることは出来ませんが、私にとってニーチェは「お前の生き方は生ぬるいぞ！」と絶えず鼓舞してくれる存在です。ツアラトウストラだけでも一語一語から強い刺激を受けずにはいられません。

本書を一通り読んでとても面白く、愉快的気分になりましたが、書評を書き始める前に、アマゾンなどの書評ではどのように評価されているのかなと思いついて見ると、「適菜(著者)こそB層だ」とか、「読むべきところが殆どない」などという情けない文章に出くわしました。

本書を読んでそのように感じたのであれば、なるほど、「ものごとの本質も判らず、適当で身近な言葉で相手を罵倒する」という人たちこそがまさにB層なのだかと納得しました。著者の指摘の通りです。

近代イデオロギーは疑似宗教なので、社会のB層化はますます進行します。B層は絶対に反省することがありません。無制限に拡大した権利意識と被害者意識がB層の行動を規定するからです。

やはり、民主主義に優る政治制度はありません。ただ、どうすれば民主主義を維持しながら、今のような機能不全に陥るような事態から逃れることが出来るのかが問題です。

東日本大震災後の1年で「動かない」日本の政治体質が浮き彫りにされました。毎日のようにテレビに向かって「頭がおかしいんじゃないの」と一人でぶつぶつ言っています。でも本書を読んで、なるほどそうだったのかと納得します。溜飲が下がる思いの一冊でした。

自分はB層かも知れないと思っている人も、いや俺はA層だと思っている人

も一読をお薦めします。

2012. 7. 10
